

平成16年9月17日
長野県協同電算

新提案

本寄書に以下の新しい提案を記載する。

1) クラスR回線の提案

160kHz付近の線路損失が40dB以上ある場合で、何らかの理由によりクラスA伝送機器等では安定した接続が困難な場面では、応急の救済措置としてクラスR回線の収容を容認することを提案する。ただし、クラスR回線は以下の条件のどれかひとつを満足していなければならない。

- 条件1： 同一カッド1回線95%値の干渉計算で、クラスA回線を妨げない。
- 条件2： 同一隣接カッド5回線50%値の干渉計算で、クラスA回線を妨げない。

尚、クラスR回線の無制限な収容、あるいは別目的での収容を規制するために、クラスR回線の総収容量を規制することは望ましいことであると考え。たとえばクラスR回線の総収容量を100万回線(全体の1%)未満とし、TTCで各事業者に割り当てるスキームを制定することには賛成する。

2) クラスS回線の提案

新たな干渉源の収容を規制する目的で、TCM-ISDN回線を保護対象とはするが、干渉源から外すべきであると考え。そこで以下の条件をすべて満たすクラスS回線を定義し、TCM-ISDNをクラスAからクラスSに移すことを提案する。

- 条件1： クラスA回線と等価な保護対象とする。
- 条件2： クラスA回線同様、無条件収容を容認する。
- 条件3： クラスA回線等への干渉源と見なさない。

3) TDDオーバーラップの影響とFDDオーバーラップの影響を等価にすることについての提案

ReachDSLは、TCM-ISDNとは異なる方式のTDD回線である。そしてパラダイン社によれば、ReachDSLの総収容数は10万回線を超えている。今後、ReachDSLとは異なる新たなTDD回線が登場し、収容される場合が予想される。

したがって第三版では、同一周波数帯域におけるTDDによるオーバーラップの影響と、FDDによるオーバーラップの影響を等価にすることを提案する。すなわち、TDD回線による非干渉時のS/N計算を除くことを提案する。

これにより、ADSLではAnnexAに対するAnnexCの優位性がなくなる。しかしVDSL回線の収容がはじまりつつある現時点において、ADSLのAnnexAとAnnexCを比較することは、もはや重要なことではないと考える。

以上。